



この人を たずねて

富山大学人間発達科学部 教授

村上宣寛氏

インタビュー
竹林由武



Profile — むらかみ よしひろ

1977年、京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程中途退学。同年、富山大学教育学部助手。同学部講師、助教授、教授を経て、2005年から現職。専門は教育心理学、教育測定学。著書は『性格のパワー』（日経BP社）、『心理学で何がわかるか』（ちくま新書）、『心理尺度のつくり方』（北大路書房）、『ハイキング・ハンドブック』（新曜社）など。

■ 村上先生へのインタビュー

——現在取り組まれている研究について教えてください。

学習障害児の学習意欲と学力の関係に関する研究に携わっています。2000人規模のランダム化比較試験で、2～3年の追跡調査を予定しています。現在はスタートしてから10ヵ月くらい経過しているところですが、その研究の中で、私は学習意欲を測定する尺度の作成を担当しています。標準学力テストのデータは入手済みで、これと暫定版学習意欲尺度の各項目との相関を計算し、基準関連的な尺度構成をするわけです。妥当性の予測的証拠としては、暫定版で既に0.5～0.6以上あります。縦断研究によって、学習意欲が実際の学力テストの成績を予測するかという因果的な関係まで明らかにできると思います。また、研究の実施にあたっては、現場の教員のひと協力して行くのですが、もちろん研究法に精通しているわけではないので、そのサポート等にも労

力を要します。質の高い研究を実施するにはとても労力は要しますが、労力を要するからといって避けては、5年もしないうちに読む価値のない研究となってしまうので、そうならないためにもしっかりと取り組んでいます。

——村上先生は心理測定法がご専門ですが、測定法に関心をもたれた理由をお教えますか。

私は、測定法は研究の根幹であるので重要だと考えています。やはり測定がだめだと、その後いくら研究を積み重ねても砂上の楼閣になってしまいます。論文をたくさん書く人は山ほどいますが、やはり質で勝負しないとダメです。そして、質を担保するためには、測定法や研究デザインに関する知識が不可欠です。適当に尺度を作って論文になれば良いというのでは研究者はだめです。たとえば、その尺度に対して批判的な人でさえも、妥当性・信頼性において非の打ちどころがないので、やむを得ず使用してしまうというくらいの質の高いものを作らな

ければ意味がありません。そのためには、短い時間で適当なものを作成するのではなく、長い時間をかけて精緻に信頼性と妥当性が担保された尺度を作成する必要があります。そうすれば、長くそして広く利用可能な価値のある尺度になるでしょう。

——2009年には『心理学で何がわかるか』という新書を執筆されましたが、最近の心理学の知見を改めて俯瞰されて、何か感じたことはありますか？

執筆にあたっては、論文のエビデンスレベルを重視し、結果の確実な論文しか引用しませんでした。そのような基準で多くの領域の論文を概観すると、99.9パーセントは引用する価値のない論文ということがわかりました。これは日本も海外も含めてそうです。心理学領域に限らず、他の領域においてもそうです。最もエビデンスレベルの高いものはランダム化比較研究のメタ分析ですよ。なので、メタ分析とそれに含まれるランダム化比較試験の論文が重要で、それ以外はエビデンスとしての価値が低いわけです。

歴史的に有名なランダム化比較試験は、1747年にジェイムズ・リンドが行った壊血病の研究です。彼は壊血病の患者にサイダー、強壮剤、食用酢、海水、オレンジとレモン、ハチミツとシロップを割り当てました。すると、オレンジとレモンを食べさせた患者は急速に回復しました。その研究成果によって、その後何百万人という人の命が実際に救われています。このように、ランダム化比較試験やメタ分析の結果が世の中を変えていくのですが、そういう論文は全体の0.1パーセントくらいしかありません。そういう意味で、99.9パーセントの論文はクズ論文になってしまうのです。なので、

私の論文もほとんどクズ論文なのですが、自分の研究だけ特別視するわけにはいきません（笑）。

——若手の心理学者に期待することは何ですか。

やはり、もっとランダム化比較試験を行ってエビデンスレベルの高い研究を発信していくことが必要だと思います。ランダム化比較試験をやるのは時間も労力もかかり大変ですが、それを避けていたら、日本ではエビデンスの低い研究しかやっていないことを海外にアピールし続けることになりそうです。そうするといつまでたっても日本の論文が海外で引用されません。それから、ランダム化比較研究に限らず、調査研究も含めて、近年研究が大規模化しています。200人くらいの調査研究はもういらなくて、2000～3000人の研究が必要とされています。なので、研究の大規模化の動向に後れをとらないように、若手が精力的に大規模な研究を実施して欲しいです。それと、サンプリングに関しての知識の向上が必要だと思います。サンプリングに偏りがあれば、2000人や3000人のデータをとったとしても、意味がありません。

あとは、心理学だけでなく、他の世界も見たいということですね。実証系の学問の方法論は共通で、我々はみな科学者なのです。科学の方法論は、医学・社会学・経済学・心理学等各領域において多少の指標の違いはありますが、測定法・研究デザインといった観点ではみな共通です。なので、心理学で良い研究をすれば、他の分野に影響を与えられます。そのためにもやはり、測定法や研究デザインに関する知識が重要になるのです。私は趣味の登山に関する書籍も出版させていただいていますが、登山に関係するものでも、ラ

ンダム化比較試験が行われています。たとえば、インソールのランダム化比較試験では、数百人の新入兵を高級インソール2種と安物のインソールにランダム割当し、8ヵ月ほど追跡調査し、足のケガの発生頻度を検討しているものがあります。また、登山スタイルのランダム化比較試験もあり、登山スタイルの違いとケガには何も関係がないという結果でした。登山の世界は、「高いインソールなのだからケガが少ない」「ウルトラライトのハイキングは安全だ」というような思い込みが多いので、そのような思い込みに惑わされないためにも、科学的な研究方法、比較研究の発想がとても重要です。比較研究に関する知識は心理学を学ぶものに限らず、一般教養として全ての人が身につけておいてほしいものです。比較研究の知識があれば、マイナスイオンなどの似非科学にだまされる人が少なくなるのではないかと思います。

■インタビューの自己紹介

インタビューを行った感想

先生の、研究の質の担保に妥協を許さない姿勢に感銘を受けました。また、質の高い研究をするために、研究デザイン・測定法が重要であることを再認識しました。私自身、研究デザインと測定法の知識に危機を感じ、それらの知識向上を目的とした勉強会を立ち上げて活動を行っていたので (<https://sites.google.com/site/studygroup13csm/>)、インタビューを通じて勉強会を継続する意義を確認しまし

た。

今どのような関心をもって研究に取り組んでいるか

全般性不安障害の発症・維持プロセスに関心があり、特に、脆弱性要因と不安症状の関係性を緩衝する要因に着目して研究に取り組んでいます。緩衝要因には、人生の目的の明確性、将来の報酬に対する選択性、環境の変化に対する反応の柔軟性に着目しています。私が着目する緩衝要因はポジティブ心理学の文脈で人の健康を促進する要因として注目されてきた要因ですが、それらが疾患の防止または改善にどのように寄与するのかについては、あまり実証的な研究が行われてきませんでした。人間の成長や自己実現につながるポジティブな側面と、病理が維持・悪化するネガティブな側面の双方に等しく焦点を当てた実証的研究および臨床実践は、病理の理解の向上、そして疾患に対する治療効果の向上につながると期待しています。どのような研究に挑戦してみたいか

諸外国では既に、ネガティブな側面とポジティブな側面の双方に焦点を当てた、うつ病や不安障害を対象としたポジティブ心理学の介入プログラムが開発されており、認知行動療法と同等またはそれ以上に症状の改善や再発予防に有効であることを報告するものもあります。そのようなプログラムの有効性評価や作用プロセスの検証を通して、ポジティブな側面へのアプローチの有用性をデータに基づいて可視化していきたいと考えています。



Profile — たけはやし よしたけ

広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期に在学中。日本学術振興会特別研究員（DC2）。専門は臨床心理学。著書は『MplusとRによる構造方程式モデリング入門』（分担執筆、北大路書房）。論文は「Anxiety control questionnaire 日本語版の開発」（共著、行動療法研究）、「Generalized anxiety disorder questionnaire for DSM-IV 日本語版の開発」（共著、精神科診断学）など。